

図書館大改造

～進化する「森の図書館」～

執筆 神奈川県横須賀市立大矢部小学校司書教諭
福留 三都



1 はじめに

「本好きな子は学力が高い」。年度はじめのあわただしい雰囲気の中、司書教諭の私と学校司書、管理職の三人で今年度の図書計画について話し合っていた。それまでなんとなく本を読むことは学習において効果的であると感じてはいたものの、読書と学力の関係に明確な根拠はもてずにいた。その場でもってきたこの言葉に、私は司書教諭としての責任の重さ、学校図書館の重要性を感じ、身の引き締まる思いがした。

国語の授業において、段落ごとの内容理解に努める子どもの学力が高いことが、平成21年度文部科学省の委託調査研究「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究C・読書活動と学力・学習状況の関係に関する調査研究」において報告されている。この報告によって、読書好きな子を育てることは、知識だけでなく感受性や想像力、表現力を育て、学力向上へとつながることが明確となり、学校図書館の重要性が再確認された。

読書に対して、さまざまな家庭の環境で育つ子どもたちが、同じ条件で利用できる学校図書館。だからこそ、どの子にも身近にある学校図書館で、私は子どもたちが十分に読書に夢中に

なれる、学習に活用できる環境をつくり、読書好きな子どもを育てるために努力していかなくてはと感じた。

平成24年度の全国学力・学習状況調査の質問紙の中で「ふだんの授業では、本やインターネットを使って、グループで調べる活動をよく行っていると思う」という質問に、「当てはまる」と答えた本校の子どもは0名であった。これによって、本校の子どもと図書館との距離感、学習のつながりとの希薄さが浮き彫りになった。

私が司書教諭として図書担当となった平成25年度4月、本校の図書館はさまざまな問題を抱えていた。破れた暗幕の閉められた薄暗い図書室には、子どもたちの姿はほとんどなかった。壁に沿って配置された書架はNDC順に並んでおらず、棚の高さと本のサイズが合わないため、本が斜めや横に倒して積まれた状態で入れられていた。掲示物は少なく色あせ、カウンターは図書室の奥に追いやられて、穴が空いていた。落書きがあつたりして汚れていた。新刊本の多くは学級文庫へ散らばり、書架には古い本がぎっしりと詰まっていた。学習に必要な本は各学年の学級文庫に分散し、調べ学習や授業で使う図書が少なかった。

もっと子どもたちにとって居心地の良い空間にしたい。魅力的な本が並び、読みたい本がす

ぐ手に取れるようにしたい。学習に必要な本や資料がそろっていて、授業で使いやすくしたい。そんな思いから図書館大改造に向けて計画を立て、進めていった。



▲カウンターは図書室の奥に置かれていた。



▲サイズの合わない本棚に収められた本

本報告は、さまざまな課題を抱えた本校の図書館を、司書教諭、学校司書、管理職、職員、子どもと学校全体を巻き込んで大改造を行った、二年間の教育記録である。

2 「森の図書館」誕生

(1) どんな空間にしたいか

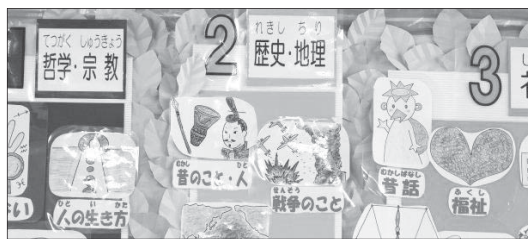
① コンセプトの設定

図書館の大改造計画は、統一感のある落ち着いた空間づくりから始まった。そこで、子どもたちが森の中で本の世界に入り込み、ゆっくり

と過ごせる空間をめざして、「森の図書館」をコンセプトとした。掲示物や飾り、イベントグッズなどはすべて森のイメージで統一し、「森の図書館」という空間自体も子どもたちに楽しんでもらえるようにした。改造後は、こちらのねらいを反映するかのように、「森の中」にいるみたいで「落ち着く」「図書館が明るくなった」「本を借りに来るのが楽しみになった」といった、利用する子どもの感想が寄せられるようになった。

① 森をイメージした掲示

◆※NDC分類に慣れない本校の子どもたちのために、分類の内容を絵にしてイメージしやすくした。掲示を製作した。これによって子どもたちは、NDC分類への意識が高まった。



▲本の分類を絵にしてわかりやすく。

◆図書館利用や貸出返却の決まりは、森の木の中に組み込まれるようにした。この製作にあたっては、それぞれの職員の得意分野を生かした参加によって助けられた。改めて「職員室は才能の宝庫」であることを実感した。

◆汚れの目立つ柱にはリーフラティスを取り付け、「森」を演出し、図書委員のおすすめ本を紹介できるスペースとした。リーフラティスには、その時期にちなんだ飾りを付けて季節感も演出した。



▲リーフラティスを使って柱を葉っぱでおい、図書委員おすすめ本の紹介コーナーに。

② 配置換え

職員作業で書架の配置換えと本の移動を同時に行った。NDC分類、子どもたちの動線、学習と読書スペースの区切り、背表紙の日焼け防止を考慮した、書架やカウンターの大幅な配置換えである。このとき、長年動かされなかった書架の後ろや棚も職員によって綺



▲中央に移動したカウンターからは、全体が見渡せる。



▲カウンターに置かれた、手作りの「森の図書館 MAP」



▶貸出日・返却日のボードも手作り

麗に拭きあげられ、まるで図書館全体が息を吹き返したようだった。配置の計画はとても重要であり、書架の位置や向き、机の向き、スペースの広さなどによって、子どもの読書への集中力や、居心地、本の探しやすさが変わるため、子どもの目線で考えることを第一とした。

また、カウンターの場所を部屋の隅から部屋全体が見渡せる中心へと移動させたことで、図書委員と子どもたちが触れ合うスペースが広がった。

③ ちょっとしたところにも本の案内

カウンターの上には、手作りの「森の図書館MAP」を置き、その時期の図書委員のおすすすめ本や季節・イベントの本、各学年の学習で使っている本が置かれている場所を、葉っぱのこま

ントと一緒に掲示している。本の貸出・返却でカウンターに並んでいるときにチェックしている子どもも多く、「この本、教科書に出てたよ」「この前植えた植物の本だ」「このシリーズ、おもしろそう」「〇年生、今こやってるんだ、懐かしいね」と、本についての会話が弾んでいる。また、貸出日・返却日のボードも子どもたちが見やすいように大きく手作りで製作し、掲示した。

(2) 必要な本がそろっているか

① 廃棄本

まず、各学級文庫に置かれていた調べ学習に必要なNDC9（文学）以外の本を、図書館に戻すことから始めた。これまで学級文庫の本を中心に行われていた調べ学習を、より充実した資料活用のできる図書館で行ってもらうためである。

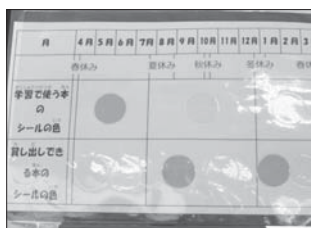
次に、多くの職員の協力のもとで行ったのが、古くなった本の廃棄である。ぎつりだった書架にはゆとりができ、おすすすめ本の面出しができるスペースが生まれた。廃棄本は約3300冊となった。

② 「本は友だちコーナー」

国語の教科書（光村図書）「本は友だち」で紹介されている本をすべてそろえ、各学年で棚を区切って配架した。また、学習する時期を、春

休み後から夏休み前、夏休みから冬休み前、冬休みから春休み前の3つに分けたことで、学習に使わない時期に子どもたちへの貸出ができるようにした。本の背表紙には、学習する時期によって色分けされたシールを貼り、わかりやすく配架した。

子どもたちは、このコーナーで教科書のなかに紹介されている本を、実際にすぐ手に取って読むことができる。自分の学年のコーナーの本を読んで学習の見通しをもったり、ほかの学年の本に触れたりすることで、学習意欲の向上につながっている。職員にとっても、常に教科書と図書館とがリンクしているため、授業のなかで並行読書などの読書指導がしやすくなったと好評である。



▶教科書に出てくる本の貸出可能期間を示したボード。



▲学習する時期を色分けしたシールで示す。



▲学年ごとに棚を区切った「本は友だち」コーナー。

(3) ゆるキャラ誕生でより身近に

「森の図書館」を森のイメージで大改造するにあたって、子どもたちが親しみのわくようなゆるキャラが誕生した。本校の「森の図書館」に住んで本ばかり読んで暮らしている本の妖精「本bakkakun」。この「本bakkakun」の誕生を物語にした、絵巻物のような掲示物を図書館の壁にも掲示し、図書集会で紹介した。森の図書館にはさまざまなところに「本bakkakun」が隠れている。また、イベントのたびに「本bakkakun」が登場して掲示物やカード、シールなどでイベントを盛り上げてくれるので、森の図書館のゆるキャラとして子どもたちにもすっかり定着している。

3 「森の図書館」の活用

「森の図書館」大改造とその後を取り組みによって、二年間で来館者数や貸出数、授業数が大幅に増加し、図書館の活性化へとつながった。

(1) 効果のあった取り組み

① 図書館や図書委員会によるイベントの実施

子どもたちが図書館に興味をもち、読書に夢中になれるようなイベントを積極的に企画し実

施した。

◆ オリエンテーション(4月)

学年・学級ごとの図書館利用の「オリエンテーション」。内容は、「森の図書館」での過ごし方や利用マナー、貸出・返却のきまり、NDC分類を使った本の探し方、調べ学習ミニゲームである。

これまで学級担任がそれぞれ独自に行っていたオリエンテーションを司書教諭が統一して行ったことで、学年の系統性や一貫性をもった、より効果的なオリエンテーションを行うことができた。

◆ 七夕まつり(7月)

おすすめ本を紹介する「短冊POP」の募集や、本を読んでピースを集め本の表紙を完成させる「ピースグランプリ」と、本bakkakun大賞(多読賞)を表彰した「七夕まつり」。

初めての「ピースグランプリ」というイベントに子どもたちは興味津々で、ピースを求めてカウンターの前には子どもたちの長い行列ができた。学級で取り組む団体戦「ピースグランプリ」も、個人戦「本bakkakun大賞」もどちらも大盛り上がりで、休み時間になると図書館に子どもたちがあふれた。

森の図書館の入り口には、模造紙と新聞紙で作った大きな竹を製作し、七夕飾りを子どもた

ちと一緒に掲示した。「短冊POP」も好評で、子どもたちはお互いのおすすめ本を教え合ったり、友達のPOPの作り方に感心したりしていた。「短冊POP」を書いてくれた子どもたちに手作りの「本bakkakunシール」をプレゼントしたこともあり、図書館の入り口の掲示板はおすすめ本を紹介した「短冊POP」でいっぱいになった。



▲「七夕まつり」に掲示した七夕飾りの「短冊POP」



▲「ピースグランプリ」で図書館に集まった子どもたち

◆ 本bakkakunまつり(11月・読書月間)

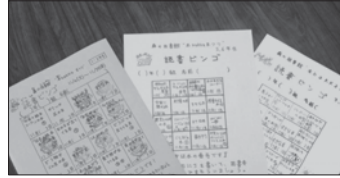
図書集会やおすすめ本を紹介する「どんぐりPOP」の募集、お題に合わせた本を読んだりビンゴを完成させる「読書ビンゴ」、森の図書館でのおすすめポイントや要望を描いた「森の図書館へのお手紙」の募集を行った「本bakkakunまつり」。

読書ビンゴも新しいイベントで、学年に応じて難易度の異なるお題の書かれたビンゴカード

を配付し、お題に合う本を子どもたちが読むと図書委員からスタンプがもらえる。ビンゴをそろえると図書委員による手作りのオリジナルしおりがもらえるため、子どもたちも読書に夢中になっていった。『森の図書館へのお手紙』も手作りのブックカバーをかけてもらえることもあり、多くの子どもたちが森の図書館を利用した感想や要望を書いてくれた。



▲体育館での「本 bakkaまつり」の様子



▲読書ビンゴカード

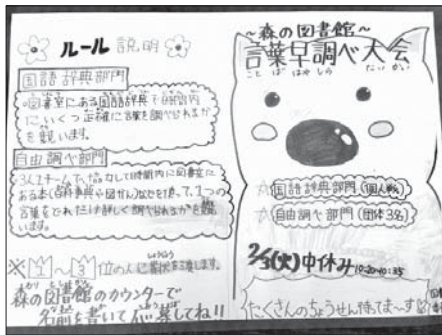


▲「森の図書館へのお手紙」を掲示

◆言葉早調べ大会(2月)

国語辞典や百科事典、図鑑による調べ学習へのつながりを意識した「言葉早調べ大会」。調べ学習の原点として言葉を調べて語彙を増やすということに興味をもってもらう目的で企画した。

用意された言葉を制限時間内にどれだけ正確に調べられるかを競ったが、学年を超えての予想を上回る参加があり、大盛況だった。また教員の参加も多数あり、低学年の子どもたちと一緒に参加したり子どもたちと本気で競ったりと盛り上げてくれた。



▲「言葉早調べ大会」の参加を募るポスター

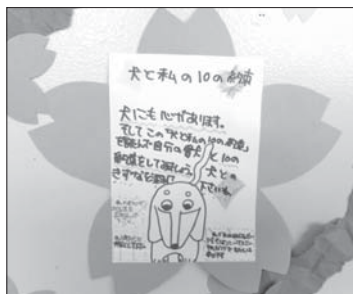
◆さくらまつり(3月)

おすすめ本を紹介する『さくらPOP』や子どもたちどうして本を読むと解ける問題を出し

合い解答する『本 bakkaくんからの挑戦状』を募集した「さくらまつり」。

自分のおすすめ本についての問題を作ったり、学年を超えて紹介された本を読み問題に答えたり、それに対して出題者がコメントしたりと、読書を通じて子どもたちのコミュニケーションを図り、読書の輪が広がるきっかけとなった。

◀自分のおすすめの本を紹介した「さくらPOP」



②子どもの実態に合わせた選書

子どもに人気のある本を選書して購入し、新刊本が入ると校内に本の紹介ポスターを掲示し

「さくらまつり」には、図書館の入り口に桜の飾り付けをした。▶





◀市立図書館の
本をHPから予
約できるシス
テムを導入



校内に掲示した
新刊本の紹介ポスター▶

た。また、市立図書館と連携してHPから本の予約をし、郵送で本の取り寄せができるシステムを試験的に実施している。

子どもたちは、読みたいけれど「森の図書館」にはなくて借りられない本をお取り寄せシートに書いて予約する。予約数が10冊集まった時点で司書教諭がHP上で市立図書館から取り寄せ、子どもたちは手に取ることができる。これにより、意欲的に読書をする子どもが増え、市立図書館との連携、意識を高めることができた。



▲本のある場所や表紙などをわかりやすく紹介している。

さらに、市内や県内、全国から調べ学習に必要なさまざまなテーマでパンフレットを集めて保管し、「らくらくリサーチラック」として学習に利用している。

③調べ学習の環境整備

学年ごとに各教科(国語・生活・理科・社会)で調べ学習のできる単元をピックアップして表にし、その調べ学習で使える本を選書してパンフレット「〇年生おすすめ本MAP」を作成した。それにより、司書教諭は不足している調べ学習の本を把握でき、職員は授業における調べ学習の計画を立てやすくなった。



▲調べ学習に使える本を学年ごとにまとめたパンフレット

	来館者数(人)	貸出数(冊)	授業数(回)
平成 25年 4月	34	0	1
5月	578	224	3
6月	476	129	3
7月	800	831	7
9月	1110	359	13
10月	1183	490	11
11月	1415	1048	15
12月	934	482	18
平成 26年 1月	839	283	8
2月	698	723	9
4月	635	328	13
5月	1635	1149	12
6月	724	870	19
7月	2211	1268	22
9月	1538	1096	21
10月	1772	850	25
11月	1930	1348	32
12月	1026	539	15
平成 27年 1月	931	361	17
2月	1016	379	16

表1 森の図書館利用状況(平成25～26年度)

(2)二年間の森の図書館の利用状況

二年間で森の図書館の利用状況は劇的に変化した。平成25年度と26年度の来館者数、貸出数、授業数をそれぞれ比較した。来館者数は約1・7倍、貸出数は約1・8倍、授業数は約2・2倍に増加した(表1)。

さらに、二年間で行った森の図書館の取り組みとの関係では、意図してイベントを企画し実施した月の来館者数と貸出数が、明らかに呼応して増加し、イベントを実施するたびに授業数が増加している(P. 52図1)。すなわち、子どもたちが図書館に興味をもち読書に夢中になれるようなイベントを、積極的に企画し実施したことが、来館者数や貸出数を大幅に増加させた

といえる。また、そのような子どもたちの変化と同時に教員の図書館に対する意識も高まり、森の図書館を利用する授業数の増加へとつながったと考えられる。

4 おわりに

大矢部小学校の「森の図書館」は、みんなが力を合わせてつくりあげたものである。担当者（司書教諭・学校司書）だけでなく、職員、子どもたち、本校の図書館を利用するすべての人たちが大改造に少しずつかかわったことで、より図書館に対する理解を深め、親しみをもつことができたと考えられる。そして、ハード面の変化だけでなく、図書館をどのように利用していくかというソフト面での改善や工夫を常に意識しながら、楽しい図書館イベントや魅力的な選書、調べ学習の充実といった面でのさまざまな「しかけ」を実施したことが、子どもたちの図書館利用への意欲を高めたようである。

さらに、職員作業やイベントへの子どもたちと一緒に参加、学習に必要な本の選書についての情報交換、会議での図書館利用など、できる限り職員に図書館にかかわってもらったことが、職員の図書館への意識を高めたのだと思う。子どもと教師、そのどちらにも効果的にしか

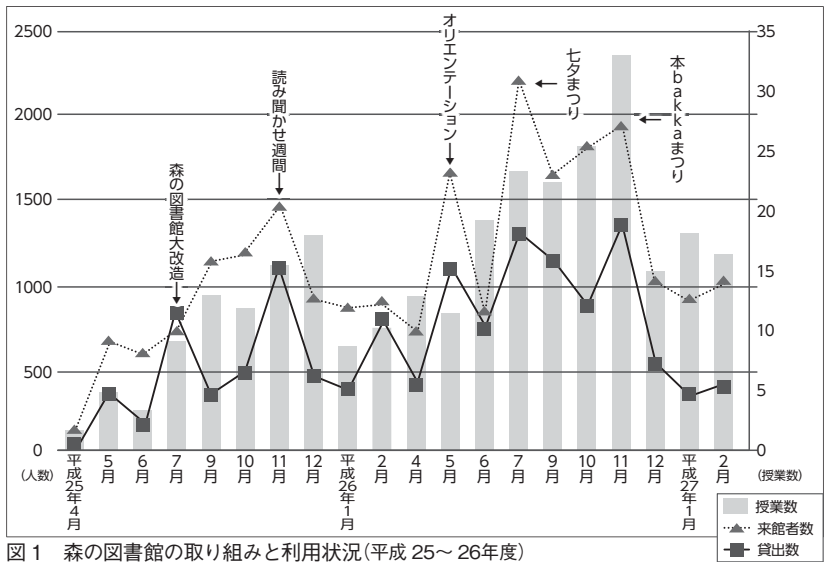


図1 森の図書館の取り組みと利用状況(平成 25～ 26年度)

わかっていく相互作用が「森の図書館」の活性化において大切であったと考える。図書館のさらなる活用について、これからいかに学校全体を巻き込んでいけるかが、今後の「森の図書館」の進化のカギといえるだろう。

受賞のことば

この度は、素晴らしい賞をいただき、ありがとうございます。大矢部小学校の森の図書館は、今日も子どもたちの笑顔であふれています。最初は図書館を活性化したい思いはあるものの、何から手をつけていいのかかわらず、手探りの日々でした。しかし、一人ひとりと作業をスタートさせた私を、一人また一人と先生方がさまざまな場面で手伝ってくださるようになり、子どもたちの手も加わって、いつしか学校全体でチーム大矢部としてかかわるようになり、森の図書館はでき上がりました。子どもたちの笑顔に励まされ、学校図書館が多くの可能性を秘めた魅力的な存在なのだと再確認できた充実した二年間でした。この実践が、以前の私のような図書館活性化へのきっかけを模索する多

くの方々の背中を、少しでも押すことができれば幸いです。

私にとってのきっかけをつくってくださったのは、「本bakkaくん」の生みの親でもある平野前校長先生、学校司書の杉山さんでした。上杉校長先生をはじめとする大矢部小学校の先生方と子どもたち、森の図書館の改造にかかわってくださったすべての方々、そして夢中になれるように支えてくれた家族に心から感謝をしています。ありがとうございました。



神奈川県横須賀市立
大矢部小学校司書教諭
福留三都